

聖心女子大学グローバル共生研究所
創設記念プレ・イベント

「黄金の林檎 (Le Pommier d'Or)」 完成記念シンポジウム

自然との共生 — 古今東西

(2017年6月23日開催)



はしがき

2017年3月、聖心グローバルプラザ（聖心女子大学4号館）に「黄金の林檎 (Le Pommier d'Or)」が誕生しました。世界各地の石から成る、縦6メートル、横13メートルのモザイク画です。

その壮大さゆえに、黄金色の林檎をたわわに実らせた大木は聖心女子大学の新たなキャンパスに突如として現れたかのような印象を受けるかもしれませんが、その萌芽は東日本大震災後の陸前高田市に見出せます。

震災後まもなくして被災した人々がホッとできる日常の空間がほしいという願いに応えるために、ユネスコとBASF社と聖心女子大学との共同による被災地復興支援事業「心に笑顔」プロジェクトが始まりました。「黄金の林檎」の作者である田窪恭治氏はユネスコから委託を受け、陸前高田市の仮設図書館に「ふらっと広場」を地元の人々と聖心女子大学の学生たちと手作りで完成させた作家です。

また、この支援事業の一環として、同市内にある無住の松月寺に1ヶ月ほどこもり、被災地への思いを込めて完成させたのが六曲一双の屏風絵「陸前高田の林檎」です。この屏風絵は被災地のメッセージを携えて現在、聖心グローバルプラザ1階のLa Mensa jasmin（ラメンサ・ジャスミン）に掲げられています。

その後、フランス大使公邸や信州の「いいづなアップル

ミュージアム」での赤い林檎をモチーフにした作品の誕生の後、「黄金の林檎」は生まれました。グローバル共生研究所が創設されることとなり、「共生」や「持続可能性」「多様性」を象徴するような作品を創ってほしいというリクエストのもとに生まれた作品です。それまでは赤で描かれ続けていた林檎がなぜ黄金色になったのか、そこに込められた想いは何だったのか、林檎の中に種はあるのか…等々、「黄金の林檎」をめぐる問いは尽きません。

本冊子は、「黄金の林檎」の完成を祝して聖心女子大学グローバル共生研究所が主催したシンポジウムの記録です。田窪氏がこの作品の制作過程での想いを語り、日本を代表する美術史家である高階秀爾氏がリングを描いた絵画史上の名作について説いた第1部、聖心女子大学で造形美術教育を専門とする水島尚喜氏が美術と子どもについて語り、また田窪氏と水島氏、そして筆者を交えて「黄金の林檎」と教育について鼎談した第2部から成ります。

こうした記録をとおして、作家個人はどんな想いを込めてこの大作を創り上げたのか、また作品に内在する普遍的なメッセージとは何かなど、読者の皆様に「黄金の林檎」との対話にいきなうことができれば幸いです。

「黄金の林檎」完成記念シンポジウム企画チーム代表
聖心女子大学グローバル共生研究所・副所長

永田 佳之

ごあいさつ

聖心女子大学学長
岡崎淑子

皆さま、こんにちは。本日は聖心女子大学に新たにオープン致します「聖心女子大学グローバルプラザ」と、「聖心女子大学グローバル共生研究所」の開設記念のプレ・イベントと講演会およびシンポジウムによるごそおいでくださいました。

本日のテーマ、「自然との共生—古今東西」は、聖心グローバルプラザのエントランス中央に掲げられたモザイクタイルの壁画、田窪恭治先生による「黄金の林檎」の完成を記念したものでございます。ご関心をお持ちのお客さまがこのように大勢お集まりくださったことは本当に喜ばしく、感謝申し上げます。

ご存じの方も多いかと思いますが、田窪先生はフランスのノルマンディー地方で制作された「林檎の礼拝堂」の作者としても世界的に知られたアーティストでいらっしゃりまして、国内外でたくさんの賞を受賞しておられます。また、本学でも非常勤講師として学生たちが大変お世話になっており、田窪先生にグローバルプラザの建物の中央エントランスに共生をテーマにした「黄金の林檎」の作品を制作していただいたことは、私どもにとって大変光栄なことでございます。心より御礼を申し上げます。

このたびオープン致しました聖心女子大学のグローバルプラザおよびグローバル共生研究所が目指すものは、本学の教育理念に直接に基づいたものでございます。すなわち、世界の一員として連帯感、使命感を持ち、さまざまな違いを超えて人々と共に生きる人間を育成すること、そのための教育、研究、社会貢献を行うことでございます。

本日はあの「黄金の林檎」の大作に込められた、原作者・田窪先生の共生へのいろいろなお考えや思いを先生ご自身から直接にお聞かせいただけるということで、大変楽しみにしております。

また基調講演「リングをめぐる文化論」では、大原美術館の館長でいらっしゃり、日本の美術史研究の第一人者でいらっしゃいます高階秀爾先生にいらしていただき、絵画史における黄金のリングの意味をお話いただけるということです。これもまたとない機会です、本当に心待ちにしております。

後半のシンポジウムでは、「黄金の林檎」の田窪先生と本学の教員2名と一緒に、共生という理念、それをさらに教育の実践の場でこのテーマにいかに取り組んでいくのかという話をさせていただきます。約2時間のプログラムでございますが、どうぞ皆さま、心ゆくまでお楽しみくださいませ。簡単でございますが、ごあいさつに代えさせていただきます。

聖心女子大学グローバル共生研究所 聖心グローバルプラザ
開設記念プレ・イベント
「黄金の林檎 (Le Pommier d'Or)」完成記念シンポジウム

自然との共生—古今東西



高階秀爾 大原美術館館長
東京大学名誉教授、日本藝術院会員

田窪恭治 美術家「黄金の林檎」作者
大原美術館大学教員教授
聖心女子大学非常勤講師

水島尚喜 聖心女子大学文学部教育学科教授
美術科教育学会代表理事

聖心女子大学グローバル共生研究所創設を記念してシンポジウムを開催いたします
新たな教育・研究の拠点となる「聖心グローバルプラザ」の壁画を飾る「黄金の林檎 (Le Pommier d'Or)」の完成を記念し、
作者である田窪恭治氏、大原美術館館長の高階秀爾氏、美術教育専門家の水島尚喜 (聖心女子大学教授) のお話を
通じて、「共生」についてご参加の皆様とともに考える時間となれば幸いです

2017年6月23日 (金) (開場17:30)
18:00~20:30

会場：聖心女子大学アリオ記念ホール
(聖心女子大学4号館 聖心グローバルプラザ3階)
渋谷区広尾4-2-24 日比谷線広尾駅4番出口徒歩2分
<https://goo.gl/maps/rzcl3aV3bk>
参加費：無料
お申し込み：郵便のFAXまたはE-mail、下記URLから
<https://goo.gl/mv7LR1>



参加申込み・お問い合わせ：聖心女子大学グローバル共生研究所イベント担当
kyocel@csacred-heart.ac.jp FAX: 03-3407-5356
主催：聖心女子大学グローバル共生研究所

〈第 1 部〉

「黄金の林檎」が完成に至るまで（田窪恭治氏による講演）

リンゴをめぐる文化論（高階秀爾氏による講演）

「黄金の林檎」が完成に至るまで （講演※）

田窪恭治

どうも皆さん、こんにちは。（拍手）聖心女子大学の新しい教育の拠点である4号館グローバルプラザの1階で「黄金の林檎」をご覧いただいたと思いますが、ちょうど去年の6月に聖心女子大学から、作品の依頼がありました。新しくグローバル共生研究所が出来るということで私なりに「共生」ということをテーマにいろいろ考えながら下絵を繰り返していたのですが、なかなか上手くいかない。やはり頭で考えていると面白くない。

そこで私がこれまでやって来たことを思案していると、8



月の終わりぐらいでしょうか。あるとき、ふっと「黄金の林檎」のイメージが頭の中に湧いてきたのです。



それから私にはもうひとつやりたかったことがあり、イタリアのラヴェンナというビザンチンモザイク壁画のサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂で見たモザイクの作品が忘れられなくて、いつか機会があればモザイク壁画を作りたいなと思っていたのです。

モザイクは、私はできれば自然石、世界中の自然の石。石というのは人間の歴史を超えて数億年という歴史を持っている世界であります。それでその石を割ると今まで見たことのないような世界が現れるのですね。そういう、人間というよりはむしろ地球の記憶をこのグローバルプラザの1階の壁面に、いろいろな時間の層を隣り合わせながら作品をつくるのが「共生」につながるのかなという気がしたのです。

しかし皆さんの中には、「この場所になぜ林檎なのか。それも、この世の中に存在しない黄金の林檎なのか」という疑問を持たれていると思いますが、その辺は私の後に講演していただく高階秀爾先生からお話いただけたらと思います。

ますのでご聴講ください。私自身、非常に興味を持っていますが、「リンゴをめぐる文化論」。これを聞き逃したら大変だなというか…。私のこの「黄金の林檎」の作品とも関係してくるので高階先生のご講演を皆さん、期待していただきたいと思います。



今日も映像の作業している尾高俊夫さんは、私の40年間の作品をつくる過程をノルマンディーであったり、ロンドンであったり、高知や広尾、

いろいろな所まで来てくれて撮り続けてくれていいです。これから、私の「黄金の林檎」の制作過程を撮り続けた尾高さんの映像を見ながら説明していきたいと思います。

*「黄金の林檎」の制作過程を映したビデオを観ながらの作品解説



9月からまず描き始めたのですが、現場は高さがあるところなので、この1メートル69センチの小さな人間なので届かないのですね。なので、いつもは釣りざおの先に木炭とかパステルとかを付けて描くのですが、今回は、もっと背が高い

所まで届く高所作業車を借りてその上から描いていくために2日間、教習所に通いました。私はいわゆるアトリエで絵を描くのではなくそれぞれの制作現場で描くタイプの作家ですが、このようなスタイルになったきっかけは、



先ほど学長さんからも説明していただきましたが、私は30代終わりにフランスのノルマンディーに15世紀末に造られて壊れかけていた礼拝堂がありまして、

それを作品化するために家族を連れて現地に住みました。結果的に11年ですが、子どもたちも現地の小学校・中学校と高校、長男は大学も卒業したわけです。その場所に住んで作品をつくるというスタイルが、そのころから私の作品の制作のスタイルになったわけですね。

※「黄金の林檎」の制作過程を映したビデオを観ながらの作品解説



再生後礼拝堂内部

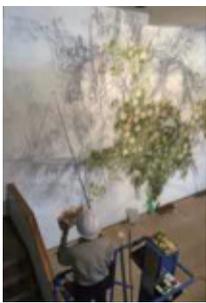
随分前の話ですがNHKのテレビでも紹介されたので、その映像を見ていただいた方もいらっしゃると思います。その後、日本に帰ってきました、また私の高校

時代を過ごした香川県の金刀比羅宮を対象とした「琴平山再生計画」という仕事を現地に移り住み、11年かけて実施しました。そして一番新しい仕事が、この「黄金の林檎」をテーマとしたモザイク壁画です。



これが描き始めたところです。9月中旬ぐらいですかね。最初、釣竿の先に木炭をつけて線を描いています。それからど真ん中の林檎に、ゴールドを付けています。大体、私は発色のきれいなものが好きなので、オイルパステルという子どもの描くクレヨンのようなものを使って、今、仕事をする事が多いのです。これはコンテかな？ 金の種類の中でも、山吹色からシルバーに近い色まで5、6種類ぐらいあって「黄金の林檎」のディテールをいろいろ取り替えながら描いています。

これはある程度林檎のイメージができてきつつある頃です。このぐらい描ければ完成がだいぶ見えてきていますが、その前にある程度、最初に何本か線を描いたときに、もう完成しているなという感じがしています。それから、だんだんバランスを取りながらずっと進めていくのですが、進めていながら何となく私自身の「魂」というか、むしろこの場合は「黄金の林檎」の「魂」というのですかね。もう描き始めたらそこに生命が宿るような気が私はしていますので、今までなかった真っ白な空間の中に、この林檎の「魂」を植え付けようとして格闘をしています。



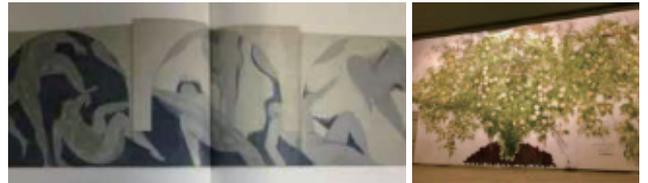
これはメバルを釣る竿ですがこの竿が一番シンプルで私は随分と絵筆代わりに使っています。これは最初に木炭とかで描いたり消したりしていますね。

この学校の方で、ずっとこの作業を見てくれた方が「線にはいろいろな音がある」と言ってくれました。

迷いなくしゃきしゃきと描いていく線の音。それから、もたもたしながら悩んでいる線の音。私は初めて自分が絵を描いていて線に音があるというのは気付かされました。それからまたその方が「色に温度を感じる」と。色に温度が、温かい、冷たい。そういうものをその方は感じてくれたようなのです。3ヵ月間描いていましたので現場に見にくれた人も多かったです。



どこで手をやめても完成しているのですが、これで完成というのは最後に手を離すときに作品は完成ということになります。何か描きながら「魂」を探る、そういうようなことを3ヵ月ほど続けました。



今回、この原画を見せることができないので残念ですが、マティスのバーンズ財団に描いた「ダンス」の習作が何年か経って出てきたように、出てくること

あるかもしれません、と。それは半分冗談ですが、レオナルド・ダ・ヴィンチは芸術のことに、「精神のものである」と言っていますが、やはり私は林檎の「魂」のようなものを何にもない空間に生け捕りにしていくとか、創り上げていく。そんなことができればいいなと思って格闘した、3ヵ月でした。

これは高所作業車にカメラをくくり付けて私の体と一緒に動いて撮っている映像です。



それでこれは何をしているところかと言うと、もう10年までいかないかな。6~7年前から私と日本製鐵と共同で建築素材の1つであるコルクという鑄鉄を開発しました。

‘CORQ®’と書くのですが、それは日本製鐵のコルテン鋼という特殊な鉄で、橋とか船、タンカーなんかを使う表面が錆びたら、その錆が錆を防いで中が全然腐食しないという

鉄です。その鉄を早い時期から彫刻家とか、今でも建築家の人たちも使っているのですが、原型は自然石を割った御影石だったのですが、割った型を取って鋳物として流し込んで作ってこのように5種類あって、その1つひとつの鉄のブロックがいろいろな場所に応じて姿を変えていく。



私はこのCORQ[®]を使った作品に関して「感覚細胞」という名称を使っています。これからが大事ですが、モザイク。今日お見えになっている上哲夫さんにこのモザイクに関わっていただきました。日本でトップの方です。建築家の塚本章二さんからご紹介していただきました。彼に出会わなかったら多分、私のこの作品は成功しなかったのではないかと思います。



今、実際に割っていますが、この自然石を割りながらイメージを整えて作っていくところです。先ほども言いましたように、何億も昔から眠っているような記憶をこのハンマーひと振りと呼び覚ましていく。それ自体とてもスリリングなことだと思いますが、それを形にしていこう。



ちょうど左に私が描いた絵があり、それを見ながら床でパネルを3分割にして乗せていく。だんだん大きい石から小さい石、これは全部自然石です。上さんたちに聞いた話によると、一番濃いグリーンが日本の古代青と言ったかな。青葉と言ったかな。そういう名前の石です。それからもう少し薄いグリーンが、中国の石。それから真っ白い中でも、ギリシャのタソス島という所で取れた白い石。それからイタリアのカッラーラという所で取れたグレーの石です。林檎の輪郭を取っている黒い石はアフリカのジンバブエとか、とにかく世界中の石がここで共存してくるわけです。金色に光っているのは御影石の表面を磨いたところに金箔を貼っています。やはり山吹からシルバーに近いような、4段階か5段階の金箔を使って貼り分けています。

これは相当寒い時期、去年の12月から今年の2月いっぱいですね。上さんをはじめ、モザイクアーティストの方が多いときは10人以上結集して制作してくれました。こうするのはやはり、聖心女子大学の新しいグローバル共生



研究所のスタートにとって本当に良かった。



これが今日、皆さんが見てくれた空間です。先ほどのCORQ[®]という鉄を床に敷いてあります。

まだ歩いていない方はぜひこの上を歩いてほしいのですが、カチャカチャという音がして本当にタップダンスでも誰かやってもらいたいなという気がします。僕は先ほどの線の音とか色の温かみとか、作品を見た方からの話に非常に感動を受けました。音も1つ、やはり大事な要素だなと感じました。



これは表面を磨いている所と、割り肌のままの所もありますので、自分の顔が映ったり、それから金箔も色の違う金箔を貼っていますので、1日のうちでも、太陽の当たり方で色や見え方も違ってきます。また厚みも、3センチとか3センチ5ミリぐらいの厚さのものから7ミリぐらいのものもあり、かなりでこぼこしています。なので、見方によって感じが違って見えると思います。



グローバルプラザの1階から2階には階段で上がれますので、今日お帰りの前に2階から見ていない方はぜひ見ていただきたいと思います。



最後にこの会場にいらっしゃる上さん、それからお仲間の皆さんに盛大な拍手をお願いしたいと思います。(拍手)

どうもありがとうございました。僕からは制作の過程を説明させていただきました。あとは高階先生のお話でございます。耳を傾けていただきたいと思います。失礼します。(拍手)

リンゴをめぐる文化論

大原美術館館長
高階秀爾

皆さん、こんばんは。ただ今、ご紹介いただきました高階です。今、田窪さんの「黄金の林檎」のお話を伺いました。今日は西洋を中心にそのリンゴを巡る文化論のお話をしますが、もちろん自然との共生や日本についてもお話します。

それでは、世界を変えた3つのリンゴというお話をします。いちばん最初のリンゴはアダムのリンゴです。このストーリーは皆さんご存知だと思います。聖書の中に出てきます。これは世界どころか、人間の歴史を変えた。アダムとエバが、エデンの園という楽園にいた。この絵は楽園の情景ですが、その楽園では木々には実がなり、何でも自由に食べていい。ところが神様の命令で、1つだけ絶対に手を入れてはいけないという木があった。それが禁断の果実の木です。それがあるとき悪魔がいて、エバを誘惑して、「この木の実は大変おいしいし、知恵が付くのだ」ということでエバを誘惑する。ついにエバがその実を取って食べて、それからアダムに食べさせる。これは神様が「食べてはいけない」ということを言ったのに、言い付けに背いたわけですね。背いたので、それがすぐにばれて追放されます。結局、そのリンゴを食べたがために、人間は楽園から追放されて地上で苦勞する。人間の歴史の中で大きな節目になるわけです。それが最初のリンゴです。ただ、旧約聖書に出てくるお話を見ると、リンゴとはどこにも書かれていないのです。



これは善悪を知る木、つまり知恵の木です。これは、15世紀の初め、フランドルからやってきた画家、これはランブル兄弟という大変に優れた画家が描いた聖書の本の挿絵です。いろいろな挿絵があります。これがエデンの園で、これがその知恵の木。ここに変な顔の、下のほうがへびになっている悪魔がいて、エバにリンゴ（木の実）を渡しています。それをエバがもらって食べた。そして、アダムにも食べさせた。聖書には善悪を知る、リンゴとは書いていないのですが、いつの間にかそれがリンゴということになってしまったのです。これはかなり後の話です。

それで英語のアダムのリンゴ、“The Adam's apple”というのは、男の人は喉仏が出ていて、あれを今でもアダムのリンゴと言います。アダムが食べたときに神様はすぐ分かった。それで神様は、「アダムはいるか」と尋ね、アダムは慌てて飲み込んで、その種が喉に引っ掛かったという話になってしまった。後で田窪さんの「黄金の林檎」に種があるかどうかという話があると思いますが、アダムのリンゴには種があった。それがいまだに引っ掛かっているから、男性は喉仏が出ている。女性はないのだという後にできた話です。実はその旧約聖書の話がリンゴになったのは13世紀の話で、次に出てくる黄金のリンゴと関係があるのですが、一般にはこれがリンゴであるとされた。ここにもリンゴの絵が描いてあります。ということで神様は、2人を怒っているわけです。そして、ここから追放されます。これはエバが誘惑されて、食べて、神様に怒られて楽園追放という刑、これを一つに描いてしまったのです。そしてこれから2人、つまり、われわれ人類は大変苦しい生活をする。楽園は離れてしまう。これが第1のリンゴ。人間の運命が大きく変わったわけです。



このテーマは、美術ではよく描かれました。例えば15世紀フランドルのフーゴー・ファン・デル・グースの絵は、非常に先の絵と似ていますよね。木があってこれが悪魔、下はへびになっています。この木があって、リンゴを言われたとおりに取って、ここでも1つ取る。そして、ここにアダムがいるという構図。このアダムとエバがリンゴを食べるといポーズはよくあります。特に知られているのはデューラー。優れた画家です。ドイツのルネサンスの最大の画家と言ってもいいと思います。



アダムとエバが、こちらがエバ、こちらがアダムです。裸体表現としても大変見事な表現だと思いますが、このエバのほうを見てみると、ここに悪魔がいます。悪魔がへびになって、リングをエバに渡している。そのためにエバはこのリングをもらって、ここにもある。それでア

ダムにも渡すわけです。従って、このアダムとエバはリングを持った、つまり最初の罪を犯した者として、ここにもリングが登場している。



それからイタリアでは、これはヴェネツィアのティントレットの絵です。16世紀の大変優れた画家ですが、こ

こではまさにリングを食べているところが描かれている。ここに知恵の木があって、エバがいて、ここにリングを持っている。もうエバは食べてしまったのでしょうか。それでアダムに差し出している。

アダムは神様に言われて、いけないと思ったが、何となくエバに言われて、どうしようと言いながら結局食べてしまうという場面です。この表現としては裸体表現、前向きと後ろ向きの男女の見事な表現になっています。そして遠くに2人は追われて逃げていくわけです。神様に見つかる。結局、この楽園から2人は追放される。ですから誘惑して食べた場面と、逃げていく場面を一緒に描いてしまっているわけです。こういう種類の絵が、ミケランジェロの天井画とか、19世紀になって数多くあります。それだけで1回分の授業になります。それは飛ばしますが、という形で最初のリングはこのアダムのリングであります。

2番目、世界で第2のリングの話をして。これが黄金のリングなのです。まさにこれは黄金のリングです。それは何かと言うと、これも皆さんご存知だと思います。パリスの審判という話があります。これは聖書ではなくてギリシャ神話です。ギリシャ神話で、ある結婚式がある。結婚式があってお祝い、ギリシャの場合には神様がいっぱいいます。ゼウスだとか、ヘラだとか、アフロディテとか。結

婚のお祝いだから、そのお祝いというので神様も呼んだのです。大いににぎやかにお祝いをした。ところが、一人だけ呼ばれなかった神様がいます。それは不和の神、不和というのは仲たがいの神、つまりけんかする神様。ギリシャは面白いので仲たがいの神様、日本でも神様というのはいろいろいて、貧乏神とかかまどの神とかいる。ギリシャには不和の神、エリスがいた。これは結婚式にはどうも具合が悪いというので呼ばれなかったのです。それを聞いて不和の神、女神は怒った。呼ばないとはけしからん。そこで結婚式をめちゃくちゃにしてやるというので、どうしたか。そこでリングなのです。

黄金のリングを1つ、結婚式場に投げ込みました。その黄金のリングというのが、実はギリシャ神話で言うと神々の女王、神々で一番の王様というのはゼウス、これは英語で言うとジュピターですね。ジュピターの奥方のジュノーという、これは神々の女王ですが、ヘスペリデスという所に特別に、他の人は使えない自分だけのリング園を持っていた。そこに黄金のリングがあった。つまり、特別のリングです。そして、それは黄金のリングである。しかし、その特別のリングをヘラクレスという英雄が盗んできた。それを不和の女神が使ったのです。このヘスペリデスのなかなか面白い、またお話があって、実は後でも出てきます。田窪さんのお話が「黄金の林檎」、大原美術館で展覧会をやったときは「黄昏の娘たち」という題、ヘスペリデスの娘たちという題で展覧会をやりましたが、それは別として、その黄金のリングを不和の女神が結婚式場に投げ込みました。ただし、ただ投げ込んだのではなく、そこに一言、「一番美しい人へ」と書いた。そこが問題なのです。結婚式場でいきなりきれいなリングが来た。見れば、「一番美しい人へ」。じゃあ、これは誰の物かというので、「それは私のだ」というのがぞろぞろ出てきてしまったわけです。その中で特に美しい、「私こそ美しい」という、これは女神ですけれども3人いました。それがパリスの審判の話です。その黄金のリングを巡って、もう結婚式どころではなくなりました。「いや、それは私のだ」と言って大騒ぎになった。

そして「私のだ」と言ったのは先ほど言った神々の女王、ヘラ。これはギリシャではヘラ、英語ではジュノーです。神々の女王のジュノーというのは、同時に結婚の女神でもある。家庭を守る神様ですから。ですから今、英語では6月のことをジューンと言いますが、あれはジュノーの月です。結婚はジュノーの月で、ジュンブライドと今でも言います。これが、「私が神々の女王できれいだ。そのリングは私の物だ」。

「いや、違う」と言ったのがアフロディテ。これはビーナスです。言うまでもなくアフロディテは愛と美の女神ですから、「私が一番美しいのだ」と言うのです。もう一人、アテネという、これはアテネの町の守護神ですが、同時にこれは学問の神様でもあり、武芸の神様でもある。アテネという、頭もいいし、腕も強いという女神。これもゼウス

の娘ですが、その3人が「いや、これは私のだ」と主張し、3人が譲らないものですから大騒ぎになってしまいます。

そこで女神たちがジュピターの所に行って、「誰が一番か、そのリンゴを誰の物か決めてください」。そこはジュピターも困ったのでしょう。うっかり決められない。しかし、それは神々の一番の王様ですから決定しなきゃいけない。そういうところはずるいですね。「よし、決めました。誰にというのではなく、それをパリスに決めさせる」と決めたと。人に押し付けたわけです。このパリスというのが、実はトロヤという国の王子様です。そこでゼウスがそう決めたとあるので、3人がわざわざトロヤまでというのが、パリスの審判の話です。



これはその審判の場面の一つ。これは行く15世紀のウテワールという画家の作品ですが、奥のほうに結婚式

のお祝いの場面がある。ここでみんな、お祝いをしている。いろいろ愛の女神が飛んだりして、周りにもいます。ところがそこにリンゴが出てきて、これがパリスです。トロヤまで行って、この部分だけ見てみますと真ん中にいるのがパリスです。そして女神がここに1人、それからここに、これはかぶとをかぶっているから、これは武芸の女神でアテネでしょう。それからこっち側にいるのが、これがそうするとジュノーということになり、ジュノーがいて、ビーナスがいて、ビーナスはキューピッドと一緒にいる。それからアテネがいる。これでこのパリスが、彼は結局、ビーナスにリンゴを渡しています。彼が見て、「ビーナスがいい」というので渡してしまいました。

そのために、これはビーナス像というのは昔からよく描かれました。ミロのビーナスとか、ルーブルに行っても、どこに行っても、ギリシャ以来ビーナス像はありますが、その後、しばしばリンゴを持ったビーナスという像があります。これは日本にもその複製が幾つか並んでいます。岡山駅前にもありますが、ビーナスが手にリンゴを持っている。これは勝利のビーナスという印で、つまりその勝利というのは、この審判争いで勝ったということなのです。ここでビーナスとキューピッドが一緒になって喜んでいる。このテーマは、よく描かれました。



これはこの間も日本で展覧会がありました。ドイツのルーカス・クラナッハという16世紀初頭の画家です。ここでは、パリスは何となく中世の騎士のような格好をしています。それで3人の女神がいて、パリスは、割に腰を落としたのんびりした格好で審判をしている。これがビーナスで

しょうね。このテーマは、美術の上ではよく描かれました。ルーベンスもこのテーマを幾つも描きました。



これはスペインのマドリッドにあります。3人の女神がいて、ここにパリスがいます。これはヘルメスという神々のお使いの神です。ギリシャからうんと離れたトロヤに、ジュピターの命令で3人を案内してきたのがマーキュリーですが、リンゴを持ってジュピターの命令を伝えて、そこでパリスが一生懸命、3人を見ているわけです。この3人の中で、キューピッドがいるのは、もちろんビーナスです。それから、ここに盾があります。武器ですね。よろいかぶと、それから盾。これは戦も強いというアテネ。こっちがジュノー。神々の女王ですが、そばにクジャクがいます。これはクジャクをお供にしている。ルーベンスはなかなか画家として裸体表現が巧みですから、非常にうまく正面向き、後ろ向き、横向き、ちょっとひねった女性のさまざまなポーズを描きました。これは絵画表現の上でも非常に面白いです。ここでパリスが一生懸命考える。それで結局、選ぶ。先ほどお話ししたように、ビーナスを選びます。それを描いたのがルーベンスではなくて、ルーベンスの影響を受けたルノワールです。



これは皆さんご存知のルノワールです。この間も展覧会に来ています。パリスがいて、ここではリングを、真ん中にいるのがビーナス。これがジュノーで、これがアテネ。これがヘルメス。ここでビーナスがリングをもらう。勝利のビーナスになる場面です。ここではリングは美のシンボルです。美しさですよ。一番美しい人。それで第1のリング、これは罪のシンボルですね。それを食べて、つまり神様の言い付けに背いた。従って、罪を犯したから人間は追放されてしまう。こっちは美の戦いがある。これが人類の大きな歴史だというのは、実はその争いはビーナスの勝利で終わった。ビーナスはもちろん大喜び。他の2人は不満なわけです。それでビーナスはパリスに対してお礼をする。リングをくれた勝利にお礼をする。そのお礼は、これはビーナスがそれを言うのですが、「世界で一番美しい女性をあなたのお嫁さんにしてあげる」と言うので、パリスは大喜び。当時、世界で一番美しい女性というのは、ギリシャにいたヘレナという女性です。これは映画にもなりました。「トロイのヘレン」という映画になって有名になります。そのヘレナというのは世界で一番美しい女性で、ビーナスがそれをパリスの奥さんにしよう。

ところが具合の悪いことに、このヘレナは既に人妻でした。ギリシャのメネラウスという人の奥さん。それをビーナスが奪ってきて、パリスに与える。もちろん、ギリシャは怒るわけですね。パリスはトロヤです。トロヤというのはギリシャがあって、地中海の反対側です。ギリシャとトロヤ、メネラウスはそれじゃトロヤへ行って奪い返してくる。つまり美が争いの種になってしまった。

そのトロヤ戦争の話というのはご存知だと思います。ホメロスの『イリアス』という長い詩に長々と書かれています。このギリシャとトロヤは10年間にわたって戦争をしたと。これが実は歴史で言うと、今にまでつながっていますが、東地中海のギリシャ、あるいは西洋世界とトロヤ、中東世界との争いなのです。それを反映したのがトロヤ戦争。昔はホメロスのトロヤ戦争の話は単なる物語といった、「いや、実はいろいろとそこに、本当の歴史があるのだ」ということを言って、それを証明したのはシュリーマンというドイツの学者です。実際にトロヤの町を発掘した。発

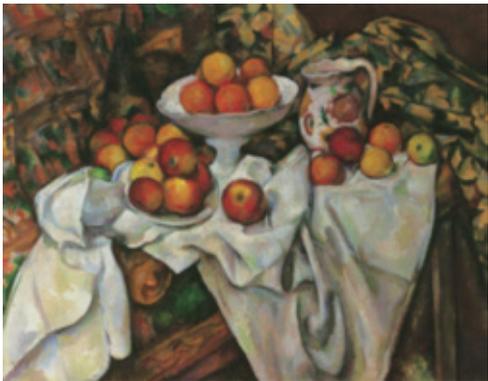
掘したら、ホメロスに出てくるような黄金のマスクだとかさまざまな遺跡が出てきた。トロヤも当時は大変に栄え、一方、ギリシャはもちろん西洋の始まりです。その2つが争った。つまり、これは東西の争いです。

従って、この黄金のリングは美のシンボルと同時に、争いのシンボルになります。第1のリングは罪です。罪の場合は、これは良い、悪いがはっきりしているわけです。アダムとエバが罪を犯してしまった。キリスト教では皆さんご承知のとおり、人間は罪を犯したらよろしくない。善悪がはっきりしています。最後の審判の日には、全員われわれはみんな再びよみがえってしまうわけで、いい人は天国に行くし、悪い人は地獄へ行く。つまり、道徳的な区別がはっきり分かります。

しかし、この戦争の場合はどっちがいい、悪いじゃないです。どっちが美しいか、どっちが強いか、弱いかということになり、争いの基になります。それはいまだにあの地中海地域を巡ってあるわけですが、その基がこのリングでありました。しかもそのトロヤとギリシャの10年にわたる争いは、結局、最終的にギリシャが勝ちます。これもお話としては有名な、木馬を使って乗り込んだとかいろいろありますが、省略します。結局、地中海世界をヨーロッパが支配します。いまだに中近東、つまりトルコを含めたイスラム世界で、イスラム世界とヨーロッパ世界とがいろいろと問題を起こすという一番の基であり、人間の歴史を変えた非常に大きな事件です。それが、この第2のリングだということになります。

さて、第3のリングとは何でしょう。それは、ニュートンのリングだということですね。リングが落ちるのを見て、万有引力を発見。ですからこれは罪でもない、美でもない、争いでもない。つまり、物としてリングを見ているわけです。では、なぜ落ちるのだろう。リングも落ちるし、石ころも落ちるし、それをいろいろと考えた。それで、ニュートンがリングを見て引力の法則を発見した。

これも本当かどうか分かりませんが、とにかくニュートンはそういう世界の動き、運動、これは物が落ちることから天体の動き、太陽が出るとか、星が回るということまで含めて、物には全て引き合う力があるということ、それをリングに託しています。これは科学思想になり、物の本質を探るということです。3番目のリング以来、西洋は科学を発達させました。科学に基づくテクニックが生まれる。科学文明、物質文明。これは今まで続いている世界がそこに生まれたということになります。そうするとリングはどうなったかと言うと、単なる物になってしまったわけです。



これは有名なセザンヌの絵です。セザンヌは、リンゴをよく描きました。セザンヌは物を、花でも何でも、肖像も描いたし、風景も描きました。セザンヌというのはものすごく時間をかける人です。肖像を描くときも大騒ぎで、モデルは動いちゃいけないと。何十回も黙って長いこと座らす。だから、誰もモデルになりたがらない。ヴォラールという人を描き、賞賛されましたが、長いこと座っているの、ついついうっかり居眠りしたらセザンヌが怒って、「そんなふらふらするな。リンゴみたいにしっかりしている」と言われた。ですのでヴォラールの肖像はありますが、普通の人ののはなかなかなく、セザンヌの肖像画はおとなしい人のに限られています。自分の奥さんは非常におとなしい人ですから、奥さんの肖像はよく描きました。それから自分の使用人の庭師の肖像画も。

風景はもちろん、時間をかけても、サント・ヴィクトワールとかいろいろと描きました。物は黙っている。ただし、花はあまり描かないです。花はすぐしおれちゃう。リンゴならばいいだろう。つまり、なかなかしおれない。それで物として、時間をかけて描きました。ただし、リンゴも大体、長く置いておくと腐ってくる。セザンヌの南フランスには、今でもアトリエに行くが残っている。造花のリンゴとか、造花、花ですね。花も描くときに、作り物の花ならばいつまでもある。それを描いたりしていると。その代わりに絵としては見事。つまり見事な形、色彩、それを象徴的な意味なしにどうやって形を捉えるかということを描いた。生涯、いろいろとリンゴを描きました。例えば、これもそうです。オルセーにあります。それがテーブルの上であって、全体の構図の中でどういうふうには輝くかというのが、第3の物としてのリンゴ、つまり、近代のリンゴの表現です。

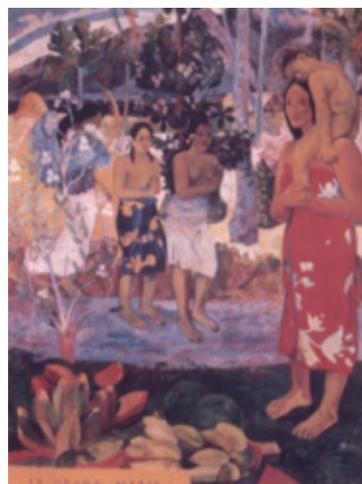
実はこのセザンヌと同じ時代に、象徴主義、シンボリズムですね。人間の心の中、魂の中、精神の世界というものを描き出そうと、文学もいろいろとあります。そういうシンボリズムというのは物を描きますが、その物にいろいろな意味付けがある。それを画家の場合には、絵画のシンボリズムという言葉で呼んでいます。その基になったのが、例えばゴーギャンです。それからさらにいえば、世紀末の画家たち。今では有名なギュスターヴ・モローだとか、やがてはシュールレアリズムとかにつながるのです。



このゴーギャンが描いた自画像ですが、ここにリンゴがあります。これがその昔の、まさにアダムのリンゴ。原罪のリンゴ。そのリンゴは実はここに花がありますが、ゴーギャンの手にヘビがいます。悪魔のヘビが。ゴーギャンは、実はその文明世界、つまり科学で進歩してきた文明

世界を嫌って、フランスを離れてタヒチに、つまり原始の生命の世界に移ります。その思想を反映しているのです。元々、下がっていけば、西洋の文明というのはエデンの園まで下がると。そういうものを否定して、その悪魔はここで自分はやっつけると。ここにそのシンボルのリンゴがありますが、それに背いて自分は原初的な生命を求める。それはやっぱりキリスト教の思想で、頭にこれは聖人の印を付けた円光を、図々しくも自分に付けています。これは新しい、自分は魂の世界をつくるというゴーギャンの思想を表しています。

実際にタヒチに行って、その思想を例えばタヒチのマリア、イエスとマリアをタヒチの人が拝みます。聖母像というのはもちろん昔からいっぱいありました。キリスト教では一番大事なマリア様がいて、イエス様がいます。それを、文明世界ではない、一番原始的な、しかし、一番人間的な生活のタヒチの人で描きます。



これは「われ、マリアを崇拝する」という題で、タヒチのマリアとイエスを描いています。面白いのは、そこ

に天使もいますが、みんなが拝んでいる。前に果物がいっぱいあります。果物というのはリンゴにも関係がありますが、リンゴだけではなく、果物を持つ女性というのを彼はよく描きました。



出す。

これもタヒチの女性です。これはタヒチですから、果物でもリンゴじゃなくてマンゴー。マンゴーを持つ女性像。これも非常にたくましい原始的な女性像。リンゴを持っているこの女性像は多少、おながが大きいのですね。子どもを身ごもっています。マンゴーの実というのは同時に生命を新しく生み



これは花、花を持つ女性を描いている。花を胸の所で抱えています。花は見るからに華やかです。しかしリンゴは実はそこから実ってくる。問題になるのは、アダムの子原罪のリンゴも、それからパリスの審判のリンゴも実だけですが、花があって、そして実がなる。ということは当然、木がある。それを、木を付けた、3人の女性でゴーギャンは描きまし



これを見ると、この女性は花輪を持って飾っていますよね。これは一番若い女性。若い女性を花で飾り立てている。しかし、左の女性は籠を持っていて、ここに果物がある。つまり中年ぐらい。一番下の女性は子どもを抱えています。つまり、

生命のつながりというものがリンゴに限らず、植物とつながっているということになる。

さて、ここまでは、もっぱら西洋を中心に見ました。次に日本、あるいは東洋の思想、そして田窪恭治も登場してきます。



です。

これは先ほどあった、ノルマンディーにある「林檎の礼拝堂」。フランスの田舎の小さなキリスト教の礼拝堂



その中に田窪さんがリンゴを描いた。リンゴの木を描いて、花を描いた。つまり、全体を描いたのです。これがまたぜひ注意しておいていただきたいのですが、西洋のこういう教会堂は完全に外は壁でふさがれて、中に神様がいます。西洋の教会堂はみんなそうです。

パリのノートルダムは有名ですね。この林檎の礼拝堂よりはるかに大きな立派なゴシックの聖堂ですが、あの中はもちろん神様の場所。しかし外は、ノートルダムの前でも、観光業者がいっぱいいるし、車が通るし、つまり俗世間です。建物だけが神様の場所。外は俗世間。非常にはっきり区別されている。これは林檎の場合も、礼拝堂も小さくてもそうです。それは当然、神にささげるものですから、これだけは特別な場所です。そこに田窪さんは林檎の木を描きました。

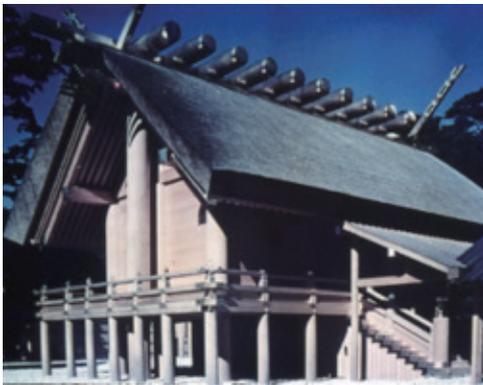
本日、実際に実物を見ていただければ分かりますが、やはり黄金の林檎を地面から木としてつくられたわけですね。

実は数年前に田窪さんの展覧会を私どもの大原美術館で開いたときに、私は林檎の礼拝堂を持っていきたいと思ったのですが、まさかそういうわけにいかない。そこで、展覧会の会場は大原美術館の脇にある有隣荘というお屋敷ですが、そこにふすま絵を描いていただいた。



これがその大原美術館でのふすま絵です。やはり樹木のデッサンです。先ほどのゴーギャンの場合も、リン

ゴは、あるいは樹木と言ってもいいですが、罪のシンボルであり、美のシンボルであり、争いのシンボルでした。しかし、ここではまず、生命のシンボルなのです。日本はそれを非常に大事にします。それが例えば神殿建築にもあるわけです。



これは伊勢神宮。ご存知のとおり、伊勢神宮というのは木造建築です。これは建築として面白いのは、先ほど

の林檎の礼拝堂など、西洋はみんな石です。ノートルダムも石です。しかし、日本は木です。木ですから、これは世界でもちょっと珍しい。かつて、昔は木の建築があちこちにありました。しかし、なかなか残らない。日本はずっと残っていて、正倉院だと法隆寺だとか。しかも現在まで日本の建築はほとんど全て素材が木なのです。今度の国立競技場、オリンピックのときにいろいろと問題があるようですが、あれも木材を非常によく使うという特色を見せています。伊勢神宮は木を使った最初の建築の代表的ものの1つです。

建物としては素朴です。掘立柱という真っすぐに、直接、地面から生える柱。そこに棟木をわたして屋根をつくったというだけの話です。非常に見事なものです。そして、しかも白木の造り。これは建築的に言うと、ある意味では大変に持ちが悪い。持ちが悪いというのは、掘立柱ですからここが腐りやすい。当時、既に日本では仏教建築が相次ぎました。青丹よし（あおによし）の奈良の都です。仏教建築は必ず礎石というのを置きます。石の上に柱を立てます。それから屋根はかやぶきですが、仏教建築は瓦です。焼いた瓦のほうが持つ。これは頻りに変えなきゃいけない。当時、日本は既に仏教建築を知っていましたが、神様の住まいとして持ちの悪い木造、掘立柱、かやぶき屋根を使いました。逆にいえば頻りに直さなきゃいけない。これは 20

年ごとの遷宮の始まりです。天武天皇のときに始まった。20年ごとに常に新しく、ずっと形を伝えていくのです。それは樹木の生命をつなげていくということです。仏教建築でも、西洋の建築でも、造られたものはその時代、時期のものです。

パリのノートルダムは13世紀に造られた。だから、「これは800年前のだよ」ということを言って、今から800年前のそれをずっと続けている。これは、これが外国人の人はなかなか分からないのですが、伊勢神宮は日本の建築史では天武天皇のとき、上代建築に出てきますが、いつ建てたかと言うとこれは遷宮、この間の遷宮はつい数年前ですよ。ね。「21世紀に建てました」と言う、「これは21世紀建築ではないか」と言うのですが、違うのです。常に新しいけれども、古いのです。これが伊勢の持っている非常に大きな意味です。



これは空中写真ですが、これがこの前の遷宮のときに撮った写真です。本殿、正殿があって、玉垣やなんかがあ

ります。これが次の遷宮のときには、そっくりこっちに建て替えるわけです。それでここを空き地にして、20年後にはここにまた戻るといってそれを繰り返すために、常に現在であって古いものがつながる。しかも大事なものは、先ほど述べたノートルダムで建物が神様の場所と言いました。伊勢神宮はもちろん神様の場所なのですが、周りも全部そうです。これが神域です。神の域なので、「五十鈴（いすず）の森」にはわれわれは勝手に入れないのです。伊勢神宮に行くときには、まず五十鈴川の鳥居をくぐります。鳥居をくぐって、途端に神様の場所になる。日本の神社というのはみんなそうです。

かつて1878年にイギリスのイザベラ・バードという人が、日本に来て、旅行をしたことがあります。そのバードさんはもうお年で、かなり体が弱かった。弱かったからあちこち、体を鍛えるために旅行をして歩く。ついでに日本にまで来て、そして女性のお身で3ヶ月にわたって東北・北海道を回りました。1878年、明治11年ですよ。明治11年というのはつい御一新、まだ文明開化の初めころで、日本はめっちゃくちゃ時代です。まだ古いものばかり。それも東北・北海道まで一人で旅をしたという大変勇敢な女性でして、そのバードの旅行記が「日本奥地紀行」といういい本なのです。今、翻訳が東洋文庫に収まっています。それを見ると、バードさんは珍しい日本の風景について書

いているのですが、1つ、引用します。「日本の特に東北地方を見ていると、所々に不思議な林というか、小さな森がある」と。「それは何だとかかく行ってみる。そうすると必ず鳥居がある。鳥居があって、小さいですが入っていくと傾斜があって、上のほうに何かありそう。行ってみると大したことはない。壊れかかった建物があるか、あるいはしばしば何もない。しかし、それは土地の人がよく行って拝む・・・」。

これは、我々にはよく分かりますよね。今も残っている、つまり鎮守のお社です。明治期は、あちこちに残っていました。今でも残っています。新幹線でずっと、私はよく秋田に行くときに新幹線を通ると、沿線は建物がいっぱいです。日本は狭い国だから、民家だとか工場だとかずっと建物、あるいは田んぼが続きます。その中に時々、こんもりとした緑の茂みがある。これが鎮守の森と呼ばれる、村の守り神、神様のいる所。実はこれはいまだに多く残っています。鎮守の森を研究している人がいて、日本にはざっと10万ヶ所あるそうです。一番大きいのは、東京という大都会、1,300万人もいる世界有数の現代都会の真ん中にある皇居です。

皇居は完全に自然の世界です。皇居の中には、今でもそうですが、電車や自動車は入れない。自然のままの自然相が残っています。皇居の中にある草花、草木類の種類はほとんど全て、ヨーロッパにあるものは全部あります。プラス数百種あるそうです。日本全体でも、植物や動物の数は多い。その鎮守の森、一番大きいのは言うまでもなくこれです。伊勢神宮についても調べた人がいます。伊勢神宮の周りの五十鈴の森の中に昆虫の種類が2,600以上の種類があるそうです。いまだにそれがみんな一緒にいる、と。そして伊勢のみならず、小さい所でも鎮守の森がある。そこでは、ごく限られた村人たちがお祭りもする。そして、普段から伐採禁止、木を切っちゃいけない。殺生禁止、捕らえてはいけないということは、もう全てに通じています。

鎮守の森という神様にささげられたそのわずかな小さい空間、あるいは大きいものは大きいです。森の中にいるものは大事な生き物。奈良に行かると奈良の鹿。これは春日神社のお使いということになる。奈良の鹿はよく出てきますが、大事なものには人は手を触れてはいけないし、うっかり殺したら大変なことになる。昔から奈良の鹿だとか、それから三輪山のへびだとか、あるいはお稲荷、稲荷神社の狐とか、みんな神様の大事なもの。傷付けても、殺してもいけない。動物も、それから植物、昆虫も、全部一緒になっている。それがこの鎮守の森であり、日本の神様の森です。これは同時に宗教的なものと絡み合って、それこそが神の世界なのです。これは西洋の天地創造をする神様と全く別。一緒になって、人間ももちろんその一部です。

これだけ現代科学、物質文明の時代でありながら、東京の街を歩いていると、お稲荷さんがあったり、あるいは小さい神社や鳥居があったりします。われわれはそれに一歩、

中に入ると別の世界の意識がはっきりあります。鳥居というのは不思議なもので、実は起源も、一体どこから来たのかよく分からない。他にはないものなのです。しかし、それは神様の世界とつながると同時に、自然の世界につながる。都会の真ん中でもそれがあると別世界になります。そういう自然と一緒にあった世界が、現在のわれわれにも生きています。これから皆さんとの、自然との共生研究所でそういうことをお調べいただきたいと思います。

さまざまな動物、植物、人間、そしてさらには自然が1つになっている環境ですが、実際には、日本でも環境破壊がどんどん進んでいます。それで困ることももちろんある。同時に、例えば伊勢は手付かずに残っています。鎮守の森も手付かずに残っています。それは非常に大事な遺産だろうと思います。それはどういう形でなされてきたのかということ、これからも私も調べていきたいです。それは、文化の現れである美術にも表わされています。この田窪さんの「黄金の林檎」はその意味で非常に優れた文化イベントであったと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

〈第2部〉

子どもが描く「リンゴ」の意味（水島尚喜氏による講演）

「黄金の林檎」とこれからの教育（田窪恭治氏、永田佳之氏、水島尚喜氏による鼎談）

子どもが描く「リンゴ」の意味

永田：それでは時間になりましたので、そろそろ後半の第2部を始めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

後半は先ほど申し上げたように、作家・アーティストである田窪恭治先生ご自身が、どういう思いを込めてあの大作「黄金の林檎」を創られたのかというところに焦点を当てていきたいと思っています。そして、共生というのはとかく理念・理想として語られるのが常ですが、それを実現するためには、どのような教育があり得るのかということ、これからの大学の教育を意識しながら皆さんと考えていきたい。そのような時間にできればと考えております。1時間弱になりますが、どうぞお付き合いください。

まずトップバッターですが、本学教育学科の教員であります水島尚喜教授から田窪先生、そして高階先生のご発表を踏まえて、はじめに発表をさせていただきます。では水島先生、よろしくお願いします。（拍手）

水島：本学の水島と申します。どうぞよろしくお願い致します。

もう3日ぐらい前から眠れなくてですね（笑）。と言いますのは、個人史を述べさせていただくことをご容赦ください。私の高校時代、国語の教科書に高階先生の文章が出てまいりまして、そこで美術というのは「美しい言葉で語り得るものだ」と教えていただきました。美術と言語は無縁と思っていただけに、そのことに非常に衝撃を受けました。それ以来『美術手帖』とか、特に大学時代によく読んでいたのですが、そこに田窪先生の素晴らしく格好いいお姿が出ていて、美術というのは、何て格好いい人たちがやっているのだろうと…言葉の世界で、美術の世界で、憧れのスーパースターのお二人が、前段でお話しいただいておりまして、私のような者がこの場にいるのが本当に不思議な感じが致している次第です。

私は美術教育という学問領域に生きている人間ですから、子どもを語るということしかできません。田窪先生から「水島さん、好きなように語っていいよ」とおっしゃっていただきましたので、子どもを

通して「美術」そして「共生」という問題をどのように引き受けていけばよいのだろうか、を考えてみようと思います。



スライドに本日の命題的なものが示されております。「子どもたちは共生的感性に生きる存在です。」この

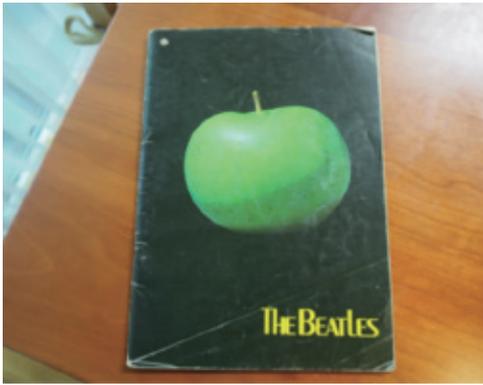
ことは逆説的にいえば、われわれ大人が失ってしまったもの、過去には持っていたが、なくしてしまったものがあるのではないか。子どもたちを通して、逆にわれわれ大人が教えてもらえるものがある、という視点で考えたいと思います。



そこでまた個人史が続きます（笑）。今年はビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・ク

ラブ・バンド」が発表されてから50周年ということで、なかなかぎわっているようです。ビートルズは様々なレベルで文化史の中に足跡を残しました。それ以前でいえば、コンポーザーがいて、作詞家がいて、そしてパフォーマーやシンガーがいるというような、分業的な音楽業界の形態がありました。サージェント・ペパーズは、世界初のコンセプト・アルバムと言われています。1つのコンセプト、物語を起点に、ビジュアルや音楽をトータルにまとめていく。そこにファッションなどの社会現象もひっくるめながら展開するという新たな方向性を示しました。

まるで子どものように、多方面興味をもち、諸要素を横断し、革新していったのです。



このスライドは、中学1年のとき、サージェント・ペパーズを買った際に、近所のレコード屋さんでもら

ったビートルズの冊子です。ディスコグラフィになっていまして、これを日がな眺めては「次はこのアルバムを買いたいな」ということを思っていました。そして、ビートルズと言うと、やはりこの表紙の青リンゴ。一説によると、ジョージ・ハリスンが青リンゴが大好きだったという話もありますし、何よりもジョン・レノンはアート・カレッジの出身でありましたので、そういった影響もあるのではないかと思います。1つのオブジェクトを通して、音楽だけではでないトータルな世界がシンボライズされていたわけです。



それから、「レッド・イット・ビー」のアルバムです。従来はレコードの真ん中のラベルには、タイトルや

ロゴがあっただけのものが多かったです。そこにビートルズは、青リンゴを持ってきてしまったのですね。



1970年前後にビートルズは、解散するわけですが、ジョンのそのときのアルバムです。ソロとして出した

もので、白いリンゴになっています。これには、いろいろなジョン・レノンの思いが感じられます。ビートルズのレコード中央のラベルのリンゴは、赤のときもありましたが、主にヨーロッパで一般的な青リンゴを使用していました。

そしてジョンはそのビートルズを旅立つときに、この白のリンゴに思いを託したのだと思います。



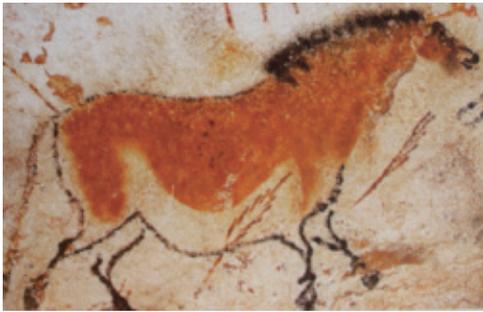
さらに今、われわれはコンピュータ文明の中に生きていて、このロゴ1つを見るだけで象徴するもの

を直感します。創業時のアップルにはジョブスとウォズニアックという盟友がいたわけですが、特にジョブスはビートルズのファンでした。特にジョンの大ファンでした。ゆえにこのロゴがあるわけです。長らくイギリス・アップルと、アメリカのアップルコンピューターは折衝をされていて、iTunesへ「ビートルズの楽曲を提供してくれない?」といったやり取りがあったようです。そしてこのリンゴがただのリンゴではなくて、かじられたリンゴですね。ここにダブルミーニング、トリプルミーニングを、ジョブスという現代の巨人が象徴させたのだと思います。こういった象徴作用によって、先ほどの高階先生のお話にもありましたように、リンゴから旧約聖書の歴史性とか、さまざまな文化的背景というのを直感したり、読み取ったりということを現代の我々も行っています。



ここで少し人類史を紐解いてみましょう。旧人のネアンデルタール人は、絵画というシンボルの使用はなかつたのではないかとされています。これは一般的な学説で、

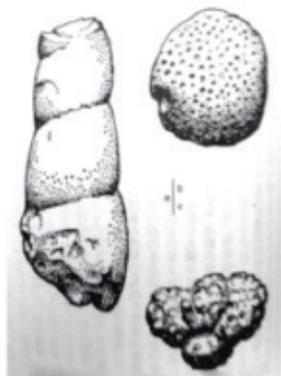
現在では、旧人・新人の範疇分けが非常に微妙なようです。ともかく前後はあったらと思います。新人のクロマニオン人は、多くの洞窟壁画を残しました。これはアルタミラで、今から1万数千年前になります。これを見ますとお分かりいただけるように、洞窟内部ですから真っ平の壁面ではないわけです。そこに膨らんだ状態の壁面や割れ目等があって、恐らくその太古の人たちは、そこに象徴された何ものかを読み取った。要するに食したであろうバイソンや鹿などのフィジカルな肉体というものを感知したのではないかと。非常になまめかしい感じが致します。



そして、これは有名なラスコー壁画です。これは約2万年ぐらい前で、さらにアルタミラから1万年ぐらいさかのぼります。既に大胆な線の使用が認められます。この線というのは、われわれ人類が新人になって獲得した、言ってみれば脳の機能なわけです。いわゆる感覚情報の中にそこに特徴的なものを読み取りながら表現していくということが行われています。



先日、田窪先生とこの絵のお話をして驚いたのですが、これはショーヴェ洞窟の壁画でフランスの辺境にあります。スライドには、ネコ科の動物というふうに書いてありますが、これは恐らくピューマであろうと。ピューマですから、恐らくこれは食の対象にはならなかったものですね。このピューマの素早い動き、恐らく人間も時には襲われたのでしょうか。そういった一瞬の動きを、この線の描写の中で表しています。動きへの感受性が、生き死にを分けていたとも言えます。現在、アニメーションが非常に興隆しているわけですが、アニメーションは当時、当然なかったわけです。でも、物体の動きを分析的に示そうとするアプローチは、とても近似しています。これらは、新人によって描かれたものといわれ、われわれと同じ脳の使い方をしていたわけです。こういう非常に巧みな表現を、既に3万年以上前に人類は獲得していました。



ムステリアン人によって蒐集された不思議な自然物

- a) 腹足類の殻型
- b) 球状ポリブ群体
- c) 黄鉄鉱塊

『身ぶりと言葉』第14章 形の言語 より

ここで、「美の起源は？」ということに進めてみたいと思います。これはアンドレルロウ＝ゲーランの

「身ぶりと言葉」という代表的な著作からの1ページです。

旧人に相当するムステリアン人の遺物が示されています。何に使われたか分からない特定の機能を持たないオブジェです。左の図は、巻貝の化石状の物体です。右上のは恐らくサンゴのような物だと思いますが、「球状ポリブ群体」書いてあります。この著作は、1960年ぐらいの出版で、図版は白黒です。右下のスケッチは、いわゆる黄鉄鉱なので、これは実際には金のようにピカピカ光るものです。「黄金の林檎」のように見えていたのではないのでしょうか。既にこの時代の人たちは、美的な物、要するに「役に立たない」、だけど「形が面白い」、「手触りがよい」、「美しい輝きだ」という感覚をもちあわせていた、と推測します。存在する物自体の美的価値を見出していた。



時代が進みます。私は昨年、イタリアのボローニャ大学で客員させていただいたのですが、これはそのボローニャにある聖堂です。画家モランディが、こよなく愛したサント・ステファノ聖堂で、時代の異なる七つの聖堂によって構成されています。



そこには、小規模なモザイク画があります。面白いことに、元々、ボローニャというのは大理石の産地ではありませんので、大理石は出ないのです。でも、ローマ人たちが造った住居が異民族によって破壊された時の瓦礫があった。それを11

世紀ぐらいになって、ベネディクト派の修道僧さんたちが一生懸命集めて造ったものなのです。ただし、先ほど田窪先生のお話にもありましたが、いわゆるビザンティンのような荘厳なモザイクではない。整合性のある幾何学的な内容ではない。ご覧になると分かりますが、シンメトリーで

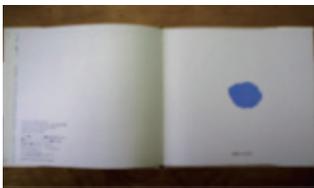


はないですね。

規則性もあることはあるのですが、何よりも言えることは、これは色が美しくていいな、これとこれを組み合わせると綺麗な、瓦礫の一片一片を一生懸命集めながら何か綺麗な構成物をつくろう、といった楽しい眩しが聞こえてきそうです。野生の思考といいますか、プリコラージュ的な感性を持った人たちの行いであったのだろうと。それは11世紀であろうが、数万年前の旧人であろうが、ある意味やっていることはあまり変わらない。



実は、今日は、子どもの話をしなければいけないのですね(笑)。この絵本『あおくんときいろちゃん』は、広く読み継がれている絵本です。主人公の「あおくんときいろちゃん」は、丸くちぎられた黄色と青の紙で表現されています。そこに目や口が描かれているわけではないのですが、子どもたちはキャラクタイズされたものを読み取って楽しんでます。作者のレオ=レオーニは、自宅のアトリエで仕事をしていた時に、足元にあった紙で、自分の息子さんの所に遊びに来た近所の子どもたちにこれを作って見せて大受けだった、そうです。



第1ページ。「あおくんです。」この絵と一文で、もう子ども達は「あおくん」のお話なんだな、ということを理解します。

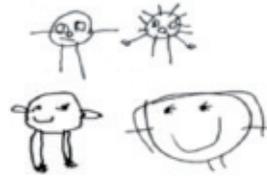


左のほうは教室を示しています。右のほうはみんなでわいわいと遊んでいる。いろいろな状況やキャラクター、性格までも、2~3歳の子ども達は既に色や形から直感しています。



そして、一番代表的なページです。青くんと黄色ちゃんが出逢ったときに一緒になって緑になっていく。これを見ると子どもたちは、柔和な笑顔になります。子どもたちはこの単なる色と形の混色を、直感的にシンボルとしてとらえます。つまり緑になって、人との融和的な世界が具体化

されるということ、象徴化された1つの世界として受け入れている。そこに共生的世界を我が身のものとして感じ取っている子どもがいます。



ここからは、子ども自身の表現を見ていきましょう。2、3歳ぐらいになると、いわゆる「頭足人」というものを子どもたちは描き始めるわけです。丸と直線だけで、色々な人物を表現します。これらは違う子が描いたものだと思いますが、それぞれが非常に個性的でいいですね。そう感じるには、われわれ大人の内なる子どもが共感しているのでしょう。



これは、3歳の女の子が描いたアニミズム表現です。当然ながら、花には顔はございません。太陽にも顔はございません。でも、この子どもは「お花がわらっているよ」とか、雨が降っていれば「お空が泣いているね」なんていうことを普通に言うわけです。本当にそのように感じている、私たち大人が世界を対象化し、客観的に見ているのとは異なって、我が身のこととして第一人称的に世界を捉えている。私が大好きなそのような表現の中に、男の子が「足がサイダーになっちゃった」。要するにずっと正座してしびれてしまって、「足がサイダーになっちゃった」と表現した。すごいなと思います。表現する語彙が少ないというよりも、実際にそのような感性の中に生きていくということではないでしょうか。

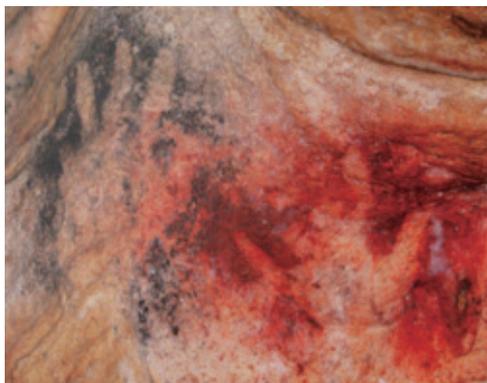


これは、当然、お父さんだな(笑)。もう皆さんもお分かりだと思います。しかも眼鏡を、ジョン・レノン眼鏡?をかけているお父さん。何よりも、お父さんのおひげを触るのが面白いのでしょうか。それをちゃんと点々で象徴しています。



これは海外にいる3歳児さんの絵ですが、普通の頭足人のように見えます。でも実は面白いことに、彼は車を表現したのだそうです。やはり見ると足が非常に立派ですし、車というものを大人からいえば擬人化していると言えるのですが、要するに一人称化しているの

です。私も、車も、お花も、雨が降っている外の様子も、全ての自然世界も、自分のわが身と一緒にいる。全て一人称の世界。ある種、非常に平和といいますか、人間が本来持っていた感覚性に満ち溢れているのだと思います。



人間が本来持っていた感覚性に
関連して。これはアル
ゼンチンにあるカルガ
ス洞窟に残された、い
わゆるネガ

ティブハンドといわれる手形です。一説によると成人式の儀式。岩肌を手を押し当て、口に顔料を含んで、そこでプツと吹きかけます。その手を取った後にこういう形が生まれる。これらの手形は非常によくコンポーズされていて、この壁面全体がそれぞれ数千年、1万年ぐらいの間にわたって、代々の人たちの手がそこにある。すなわち、このような儀式を通して、時間的、空間的な世界の中に、「この私」の位置付を自覚するのでしょうか。世界は、私とご先祖様たちと一緒にだよ、という共生的な感性に満ち溢れて生きていたのではないのでしょうか。世界への帰属意識みたいなものが、この行為の中に表れているような気がします。

幼児さんの フィンガーペ インティングから



そこで、
子どもで
す。これは
2歳ぐら
いの子ど
もですが、
みんな大
好きなの
です、手
形遊びが。
絵の具を出

しておく、みんな手にペタペタくっ付けて、フィンガー・ペインティングを自然発生的に行います。そして、自分の身体がそういったことに慣れてくると、やがて自分の脳の内部で、なんらかのイメージを起動させるのだと思います。絵を描き始めるのです。同様の事例が、多くの洞窟絵画の周辺でも見られるそうです。そして、右下には、先生方が形に残るように、転写して写しとってあげています。版画絵として残してあげることによって、子どもたちは、自らの行いの意味や価値を体感できるようになります。フィンガー・ペインティングの教材的価値が、示されていると思います。

さらに、様々な国や子どもの絵を見ていきたいと思いま

す。それらは、直感的で、技術的には未熟かもしれませんが。でも子どもの絵の中には神話的世界や人類が築き上げた全ての象徴的意味合いや価値が含まれています。田窪先生のような素晴らしい立派な世界は現出できないかもしれませんが、ある意味、これは田窪先生に失礼な言い方ではなくて、田窪先生のような真にアーティストと同質の内容を実践しているといえます。



これは先ほどの高階先生
のお話にも、繋がると思
います。蛇が描かれた日本
の3歳児さんが描いた「ヘ
ビくん、雨が好きな？」と
いう作品です。私はある児

童画審査会でこの絵が「いいなあ」と感じ入りました。右側には恐らくサクランボとブドウだと思います。子どもたちはある種の豊穡性とか豊かさみたいなものを、木の実や果物で表現します。それからヘビも、子どもの絵にはとてもよく出てきます。そして自然現象としての雨。自然現象も非常によく描き表します。このような子どもたちの感じている世界が、しっかりとこの絵の中では表現されている。これは3歳児さんですが、既に一般的な意味での世界観というものを見いだすことができます。



永田先生
とスタディ
ツアーでス
リランカを
訪れていま
すが、その
スリランカ
の15歳の、
日本でいえ

ば中学校3年生の作品です。これも鳥、火、そして太陽があって民族の世界観が、素晴らしい技法で表現されています。と同時に、やはり自然が豊かと言われている国々の子どもたちには、自然への希求とか位置付け方が、バランスよく表されているなあ、という感じがします。



これはタイの10歳
の子どもで
す。とても
カラフルで
す。動物等
々、たくさ
ん描かれて
います。

そして、ここにもやはりリンゴのような木が描かれていま

すね。「命に満ち満ちている」という感じでしょうか。先ほどのゴーギャンの絵に繋がるかもしれません。



それからこれは日本の子ですが、「ビッグアップル」と書いてあります。大きなリンゴということ

で、やはりこの子のテーマは、豊穰性でしょう。10歳ぐらいの子で描き込んでもありますが、先ほどの3歳児さんと同じようにリンゴが持っている豊かさの意味合いを感じます。大きなリンゴを一生懸命に取ろうとしている様子だと思います。良い絵ですね。



また、こんなリンゴの木もあります。世界の豊穰性を、木とその実であるリンゴの関係性でシンボライズしながら、想像性豊かに表現しています。



バングラディッシュの9歳の女の子によって描かれたものです。1つの平和的な世界が、まさに世界の調和、共生的世界観といった思想が絵の真ん中にリンゴと共に可視化されています。



ただ、礼賛だけでなく、批判的な目もちゃんと子どもは持っています。この子はトルコの男の子。トルコがどんな自然環境の状態にあるか、私は専門じゃない

ので永田先生、大橋先生に伺わなければいけません。タイトルには、「救世主を探す」とあります。10歳前後の子どもたちが、この地球環境への共生的視点や感性を持ちながらそれを絵に表すことができる、未来は捨てたものではないということを、この絵から教えてもらいました。



そして、最後に教育の大切さにつきまして。私はこれまで図工美術教科書の作成に関わってきました。これは平成14年の高校2年生の内容です。田窪先生の「林檎の礼拝堂」が取り上げられています。当時の高校生たちは、この題材を基に学習を深めたのですが、色々な美術関係者に会うと、田窪先生のこの林檎の礼拝堂はとてもインパクトが強かったとおっしゃいます。「この教科書の題材がきっかけで、美術関係の編集をやり始めました」という人もいらっしゃいます。人々と自然、そして歴史性が交わり、後世に伝えるべき環境作品が生まれた。そこに教育的な関係性が絡みながら、未来への架橋が立体的に現出された。教育的な営為の可能性が示されていると思います。



これは永田先生が中心となって実施された震災後の陸前高田市における松月寺の寺子屋プロジェクトの写真です。

私も少しだけ関わらせていただきました。田窪先生と子どもたちはここで一緒に、「夢リンゴの木」を描きました。まずアーティストがその木の幹を描きます。最初の段階で子どもたちは、田窪先生には失礼な言い方ですが、「このおじさんは何だろう？」みたいな感じでいたわけです。ところが先生がクレヨンを持って描き始めた瞬間に、子どもたちはまさにそこに身を重ねて「あっ、すごい！」と直感し、そのリアクションとして自分の思いを身体化しようとしました。今度はリンゴの実を子どもたちが様々な思いを込めて描く番です。



先ほど紹介しましたベネディクト僧侶の人たちが、モザイク壁画を造る際に「あっ、この色はきれいだな。

ここに入れよう」というブリコラージュ的な展開がありました。それは、ここにも見られると思います。子どもたち、1人ひとりとは異なった人間ですが、「隣の子がこんな絵を描いたから、私は、こういうのも描こう」と、他の個性を尊重しながら、自分が生きる方策を探る、そういう感覚に満ちていると思います。

子どもたちは、その場にいた人たちの思いを、自分の身の中に取り込んで、さらに創造的に表現していきました。



向こうに見えるのが広田湾で、太平洋に繋がっています。プロジェクトは、2012年の11月の寒い日でしたが、子どもたちの笑顔と共生的感性に溢れる姿

から、この世界というのは、まだまだ大丈夫という、そんな思いを強くしました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

「黄金の林檎」と これからの教育

永田：水島先生、ありがとうございました。それでは引き続きこのまま、鼎談のほうに移りたいと思います。田窪先生どうぞ、ステージのほうにお上がりください。皆さん、拍手でお迎えください。(拍手)

後半の後半ですが、もう少し共生について焦点化して、いろいろ話をしていきたいと考えております。実はうちの学生たちはこのモザイク画、「黄金の林檎」のいろいろなうわさを聞いて4号館、聖心グローバルプラザに来て見入っていました。それで、「ここに幾つの黄金の林檎があるのだろう？」という話になって、みんな違うことを言うのです。皆さん、林檎がここに幾つ存在するとお考えですか。さっき田窪先生に聞きましたが、ご本人はご存じではなかったようです。ちょっとお聞きします。「まあ、20個ぐらいだろう」という方は手を挙げてください。おられる？「50個ぐらいじゃないか」と。はい、8分の1ぐらいですね。「100個ぐらいじゃないか」という方、どうぞ。多いですね。3分の2ほどです。では150。何か競りをしているみたいですね(笑)。5人、6人、でしょうか？答えは211です。一生懸命、朝から2人の大学院生が数えたところ、211もたわに黄金の林檎になっているということです。

水島先生の話と田窪先生の基調講演、私の中では妙に重なってきました。最後に共生を意識して、高階先生から日本ならではの共生、つまり「神様の世界に近付いていくと自然と一体化するという、世界でも稀有な在り方なのではないか」というご示唆がありました。一方、水島先生は主に子どもですが、対象と瞬時にして一体化してしまう子どもたち、対象と自分を分けないということを述べておられました。人間は世界と一緒にだというふうに、洞窟壁画もそうですよね。同じような例として挙げられていたかと思います。



シンポジウムの様子



早速ご質問させていただきたいのですが、溶解体験というのを幼児はいとも簡単にしてしまうけれど大人はなかなかできない。それは子どもならではの力なのでしょうか。

水島：恐らく子どもたちは頻繁にそういう溶解を経験していると思います。「溶解」と言ってもお分かりになりますか。溶ける解。こちらの「妖怪」ではございません(笑)。世界とわが身がまさに一体となったような感覚ということですね。これは別の言い方をすると、複論理的な神話的時間に生きるということにもなると思います。われわれは近代の合理主義の、直線的な時間の世界に生きているわけですが、子どもたちはまさに没頭する中で、対象を溶かし込んでいく中でその世界を生ききっていると言えます。そういった意味からいえば、子どもだけの世界と言いたいところですが、ただ田窪先生のように、まさにこれは溶解体験なしには、世界とわが身を重ねないことには成り立たない美術制作の世界があると僕は思っています。田窪先生、例えば時間の経過を忘れて絵に夢中になってしまったみたいなことはないですか。

田窪：それは子どものときですか、今ですか(笑)。

水島：今、です！

田窪：年齢のせいでも昔ほど集中力は続かないのですが、それを忘れてというのは、常に描いているときはそれに近いですかね。

永田：無我ということですか。

田窪：いや、そこまでではないと思いますが、意外と無我ではなくて、そそっかしいほうだと思います(笑)。作品をつくっているときは、電車の中でもずっと、携帯の画像だとかそういうものを見ながら。バスに

乗っていても、歩いていても、常に絵のバランスを考えたりしているので、ちょっとその溶解体験というのと種類が違うかもしれないですが、無我だったら危ないですから、車に当たったりするのでは。そこまでではないのですが、そそっかしく、何か忘れ物をしたりすることは多いです。



田窪恭治氏

永田：子どもが絵を描いているときに一体化する、子ども独特の力、一体感というか、一体感を持つ力ですよ。大人にはないのかなと思いつつながら、先ほどの水島先生の話聞いていました。それでふとした光景が私の中に浮かんできました。この企画をコーディネートさせていただいて、いろいろな方が「黄金の大木が広尾にできる」といううわさを聞き、私の所に問い合わせがきて、何人か、当時は工事現場でしたがお連れしました。

そのときに「どうぞ」と言って、皆さんが今日お入りになった4号館、この建物のエントランスにスーッと入っていくと、吸い込まれるように壁の方に行ってしまうんですね。それを私は後ろからいつも見ていて、「人間は語りかけられる存在なのだな」というのを何度も思いました。多くの方々があの「黄金の林檎」、この絵に語りかけられていると思ったのです。そしてしばらく経つとこの絵と対話をしているというのを目撃しました。

黄金だからかもしれませんが、多くの方が、それぞれの人生の中で、今、このときを祝福されているような瞬間を目撃しました。この絵は何なのだろう、この絵の持つ力は、と思って、溶解体験というのはひょっとしたら子どもだけではなく、アーティストにも、そして見る側にもあるのかなと思った次第です。その辺、水島先生はどうですか。

水島：例えば子どもたちは金色が大好きです。金色はカラーシステムに属する色ではないですよ。材質的なものの属性に関わる視覚的現象なのですが、やはり色の1つのシステムから外れたもの、スーペリアなもの、イツツ・スペシャルな存在。で、子どもたちは、例えば色紙があると、「金色！」とか真っ先に取りに行くわけ。そこに何か直感するものがある。卓越したものがそこにあって、そういったもの

に心が惹かれるのかな。先ほどのムステリアン人たちが黄鉄鉱を集めていたという事例と同じように、そこに1つのスペシャルな美的な世界が現出している。言ってみれば人間はやはり身体を持つ動物ですから、その感覚性とか、五体がその中に響応するものがあるのでしょうか。先ほど田窪先生が、石を割りながら、ここに関わられた皆さんが1億年、2億年という時代を、時間を現出されているのではないかというようなお話をされましたが、子どもたちの肉体、身体を通して、まさにそういったイメージ世界が現出されている位相は「黄金の林檎」と通底する部分なのではないかという気がします。

永田：カトリックの大学に勤めながら信者ではない私が、こんなことを言うのはなんですが、先ほどの「祝福されている」場面、スペシャルな色に包まれて、たわわな「黄金の林檎」が降り注ぐようにこれを見に来た人を祝福している。そんな場面に幾度か出くわしたことがあります。変な言い方ですが「教会性」みたいなものが、あの空間にあるのかな、なんて思ったときがありました。

田窪先生のご講演の中で、確かイタリアのラヴェンナのモザイクに影響を受けられて今回の作品も創られたということですが、その聖なるものは創られたときに意識されているのでしょうか。

田窪：そんな大それたことは思っていないので…。今、皆さんの話をお伺いして思ったことは2つあります。1つはその溶解性、一体化するみたいなもの。それは当然、作家にもあるでしょうし、永田先生がおっしゃったように、観客、見ている人もその現場へ入ってくると、その空間に一体化されるというか、溶解というのでしょうか。そういうことがあると思います。

それで2つ目は、子どもとか大人とかという話をされていたと思うのですが、以前、岡本太郎という作家がよく言っていたのは「『なんだ、これは！』という子どものような絵、常識に縛られない自由な作品がいいのだ」というようなことです。先ほど水島先生が映像を映した中で、僕はショーヴェーだけはもちろん、アクアラングをしょっていかなくちゃいけないので入れません。ラスコーとそれからアルタミラは見ています。洞窟の中に入っていくと本当に何とも言えない一体感で、ダ・ヴィンチが芸術は「精神のもの」と言っていたとご紹介しましたが、ロマン主義の巨匠でウジェーヌ・ドラクロワというフランスの画家が「絵画というのは、画家の魂と、それから見る人、観客の魂の間に架ける橋である」と。それは詩人のランボーとか、音楽家のベートーベン、

そういう人たちもそれぞれ同じようなことで言っているということをルネ・ユイグという人が書いています。ドラクロワではないですが、画家というのは自分の自我がありますので、いろいろと表現したいと思っていますが、画家の魂と見る人の魂が1つの場を共有しながら一体化するというのが、最も幸せな世界じゃないかと思います。それは音楽でも、演劇でも、いろんなジャンルであり得ると思います。

それでもうひとつ、ラスコーに入ったときにこれは果たして子どもが描いたのか、大人が描いたのか。僕は大人だと思います。作家と観衆というのはある意味、個人個人、生きている人はみんないろいろな魂を持っていて、その一体化できる瞬間に立ち会ったときに、本当に幸せな気持ちになるのではないかと思います。

永田：ありがとうございます。ということは私が見た、出くわした、あの祝福されていた背中の人たちは、田窪先生の魂とご自身の魂が交流していたということでしょうか。「黄金の林檎」はとても深い絵だなと改めて思えてきました。

次にどうして「黄金の林檎」が共生なのかについて考えてみたいと思います、一般には、世界中の石がこの絵には集まっているわけです。緑は中国、白はギリシャ、茶色はインド、あとは多くの日本の石も入っていると聞いております。そういう違う色、そして性質の石が集って、交わずに1つのハーモニーをつくっているということで共生の象徴なのだろうといわれています。

ただ、先ほどのお話を聞いて、田窪先生はこの絵に深い意味を込めつつ意識的に、または無意識につくられたのかなとも思います。例えば今日、私が最初にご挨拶をさせていただいたときのスクリーンにパステル画が映っていました。巨大な同寸、同じ大きさのパステル画です。「幻のパステル画」といわれていますが、それをまず同じ場所に貼って、それから床に石を置いて、アーティストの皆さんのお手伝いの下に完成させて、パステルを外してから石を集めた板を壁のほうを貼ったということですね。なぜパステル画をわざわざ取ってモザイク画なのかというところもちょっと聞いてみたいです。田窪先生、いかがですか。

田窪：第2部は教育の話だと聞いていたのですが、あまり僕の話ばかりしているのも皆さんがしらげちゃうと思うのですが。僕は特にフランスの小さな礼拝堂を再生するので10年少し現地にいたのですが、そのときに屋根の問題とか、床の問題とか、壁の問題とかいちいち引掛かったときに、壁のときには

ポンペイの秘儀荘の赤が見たいと思ってナポリに行ったり、ラスコーへ行ったりとか、マティスの南仏にあるロザリオ礼拝堂ですね。イタリアのジョットのスクロベンニ礼拝堂もですが。日本にいたときにはいろいろと画集は見ていましたが、本物を見たことがない。それで本物を見ると、これは自分が決めるのですが、作家の良し悪しというのは自分の中でできてきて、それでマティスの礼拝堂なんか僕はもう10回近く行っています。マティスは最近の作家ですが、ラスコーは1万7千年前。ショーヴェは3万2千年前。そういうパッションというか、情熱みたいなのをみんな残してくれているのかなとそんな気がして。時空を超えて幸福な気持ちになります。石というのはもちろんその原点ですし、ラヴェンナで見る前に、よく南仏なんかの円形劇場とかに行ったりすると、ローマ時代の床にあるようなのが、かすれてありますよね。イタリアのホテルだと床はそのままガラスを張って、昔のものを見せたりしている部分もあります。日本の木の文化とはまた違って、石の文化というのはかなり2,000年も、西アジアからいけばそれこそもっと3,000年、4,000年、エジプトなんか5,000年と続くわけですから、本当に人類の先輩たちのパッションがまだ生きている。もっといえばその死骸、イヌもネコも含めて、それが石になる。

ずいぶん前の話ですが、ロジェ・カイヨワというフランスの詩人で文芸評論家の『石が書く』というきれいな本を手に入れて、文章ももちろんそうですが、石を割った写真の断面を見て、本当に感動しました。いまだに好きな本です。石は自分で作ることが出来ない。悔しいですが、ダ・ヴィンチもミケランジェロも誰も作ることが出来ません。自分でできない世界というのが絶対あります。それはひょっとしたら、本当に今、先生たちが一緒に関わっている子どもたち一人一人かもしれないし、子どもも大人もなくて、人間という感じがします。人間だけではなくライブニッツ的にいえば、イヌもネコも意識があるというような言い方をしていますが、そういうことといえば、動物も植物も本当に意思があるのではないかという。そういう意味では上さんたちと仕事をさせてもらって、この作品で僕は初めて石を使って、ちょっと自分を越えた、遠い夢を見させてもらいました。

永田：人間を超えた存在として石と向き合って、皆さんはこの壁画を創られたということですね。やはり石の時間にはとてつもなく長いものがあります。上さんからも石を割るごとにそうした時の流れを感じているというお話も聞いたことがあります。我々は悠久

の時の流れの延長線上、すなわち現代に生きているわけですが、田窪先生はこの大画を創られたときに現代社会、またはその現代社会の行く末みたいなのを意識されてつくられているのでしょうか。

田窪：不勉強で申し訳ないですが、個人的な話ですが、先ほども作品を作っているときにわれを忘れるとか、それから今の、作品をつくりながら未来についてというのはあまり、僕には正直言って全く想像がつかないです。明日のことは分からない。だから、ゴーガンはすごいなと思っているのです。彼は「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という絵を描いています。僕は過去と現在については感じる事が出来る。しかし、未来についてはどこへ行くのかちょっと分からない。日本だけかもしれないのですが、1970年ごろからすごく時間がタイトになって、24時間街中に電気がついていて、非常にせわしない時代になってきて、知性とか理性とかという意識が進化しているのかもしれないのですが、感覚・感性・情熱そのものが少し希薄で窮屈な時代になってきているのではないかといい気はしています。これは僕らの年齢とか、僕らよりちょっと上の先輩たちは特にそう思われるかもしれませんが。日本でいえば大正ロマンとか、戦前のその文学的な世界、それから戦争を挟んで、いろいろな先輩たちがいろいろな文化を築いてくれたと思います。今は生活全てが便利にはなっていますが、昔と違って芸術とか感性とかそういうものがちょっと劣勢な時代かなという気がします。特に、表現行為における未来を予測することが僕自身には難しい。「今、第4の産業革命だ」とか言っている経済学者もいますが、僕は明日のことについて18世紀の産業革命以前の人々が「現代」を想像できなかったように非常に推測しづらいと思いますね。

永田：ありがとうございます。知性とか理性とかではなくて、感覚・感性・情熱が非常に窮屈になっている時代であり、われわれはその中に生きているのだとい

う言葉がとても印象に残りました。

さて、この辺で後半、巻きを入れて、最初にお約束した教育の話もできたらと思います。実は先ほどの溶解体験も、それで今、田窪先生がおっしゃった感覚・感性・情熱と、パッションということも、現代の教育が取りこぼしてきた、または意図的にどこかに置いていったのではないかという気がしてなりません。そういう意味で先ほどの水島先生がおっしゃった溶解体験や一体化というのは、理性的に隔て分けて、それを分析対象としていくという教育の在り方とはちょっと違うのかなと思います。そういう教育の在り方が重要になってきている現代において、この「黄金の林檎」の大作をどういうふうにか水島先生は教育の現場で生かしたいと思いませんか。

水島：まず具体的には子どもたちに来てもらって、田窪先生のこの絵を見てもらう。何よりも体験してもらう。そこから全てが始まりますので。やはりわれわれはついついモザイク的なもの、石のモザイク断片ではなく、非常に浮ついたイメージの断片の中で、この情報化社会を生きていると思います。そうではなく、実際に感覚することが尊くて、そこから全てのものを立ち上げなければ、われわれの社会というのは本来、成り立たないはずなのです。そこが非常に脆弱になっていると思います。その辺りの話をすると時間が足りなくなってしまうので割愛させていただきますが、いずれにせよ、近代の装置としての学校というのは目的意識に満ちて、解答があるというところを最終地にしながら、全ての教科を推進してきたところがあります。解答を当てはめる生き方ではなく、人間が人間として主体的に生きていくために本来どうあるべきか、やはり今一度ここで、何のために教育が在るのか、また、その方法論みたいなものをこれから模索していきたいなど。そのための素晴らしい教材を提供していただいたと思っています。

永田：ありがとうございます。人間が人間として生きてい



岡崎淑子氏



高階秀爾氏



(左から) 永田佳之氏、田窪恭治氏、水島尚喜氏

く存在のための教育、つまり人間として‘在る’ための教育が大切なのだということですね。近年は、高等教育ですら、人間が何かになるための、また何かをするための教育だということばかりが先走ってしまって、合理的なシステムの中で大学も変わってきている現実があると思います。今、水島先生の「人間が人間になるための教育」、まさに私の中でドンピシャで重なったのは、ユネスコがそれを「learning to be」、人間が人間になる、もしくは「人間存在を深めるための教育」として1970年代から主張してきたことです。グローバル化の時代になって、さらに先ほど田窪先生がおっしゃった知性とか理性の教育、知るための教育や技術教育、つまりスキルを身に付けるための教育ではなくて、「存在」のための教育が必要なのだということ、実は先週、ユネスコ本部に行っていたのですが、グローバル化に危機感を抱く専門委員が声をからして語っていたのを思い出しました。

皆さんが今日、この建物に入る左側に、「BE * hive」という名前が付いた展示・ワークショップのスペース、昔のJICA「地球ひろば」があります。その命名は、「BE」というのはハチの‘Bee’と重ねているのですが、「Bee」ではなくて「BE」なのです。ダブルeではなくて、Eが1つです。それは先ほど申し上げたユネスコの人間存在を深めるための学び、まさにその学びが今の世の中で必要で、そういう学びや教育をグローバル共生研究所としてもやっていきたいというような話の中から生まれた名前なのです。まさにそういう意味では、「黄金の林檎」がグローバル化でせわしくなくしている私たちを立ち止まらせ、存在レベルでの出会い、すなわちそれまでの人生で出会ったことのないような異なるものとの出会いをもたらすきっかけとなり、BE * hiveで学びを深めていくプロセスが求められているというふうに思いました。

田窪先生、そこら辺は教育の話ですが、実は田窪先生は非常に教育に造詣が深く、教育論を語り出したら、特にお酒があったら止まらないぐらいだと思います。今、実は文科省をはじめ、アクティブ・ラーニングという、活発に学ぶことの重要性が叫ばれている昨今ですが、先生にとって人間存在を深める本当の教育、または本当の学びというのはどういうことでしょうか。

田窪：せっかく永田先生に振っていただいたのですが、僕は教育というのは、今までほとんど常勤の先生になったことがない人なのであんまり偉そうに言える立場ではないのですが、先ほども高階先生がずっと「黄金の林檎」も含め、3つのリングですか。話を伺っ

て感銘を受けていたところです。4つ目のリングが遺伝子操作になってしまうのか、その辺が僕は疑問です。先ほどちょっと、「第4次産業革命」と軽く言いましたが、もうドイツではそれを先駆けてやっている、いわゆるIoTを使いながらコントロール、管理していったりすることかもしれないと思うのですが。

ギリシャ神話とか、それから聖書、画家ではクラナッハがいて、ルーベンスがいて、それからセザンヌがいて、ゴッゲンがいて、現代につながっています。僕はさっき、「ヨーロッパのいろいろな所を制作の必要上で見て回った」と申し上げましたが、例えばロマン主義のちょっと前ぐらいですか。グランドツアーというのがヨーロッパにあったと思いますが、そういうことというのはやはり僕は必要なのではないかと。ゲーテなんかはイタリア紀行を書いているし、それから日本でも和辻哲郎が「イタリア古寺巡礼」を書いています。だから、日本とはまた違った意味で残っている文化を、ラスコーなんかも含めて、考古学や、そういう歴史とか、現場に直接出向いて行って耳を傾けて、昔の人の魂を聴き取るような教育というのは、必要なのではないかなと思っています。

それでももちろん、創造的で新しいことを考えていくというのも大事かもしれませんが、僕は美術の世界で申し上げますが、先ほどの高階先生の映像を見ると、それひとつひとつの作品が、例えばリングの実のような気がするのです。だからこの「黄金の林檎」のモザイク作品がどの程度、みんなが感じてくれるか分からないのですが、そのギリシャやローマの話からいえば、まだ2,000年やそこら未来の話だと思います。

ある日、水島先生たちが小学生とか、中学生とか、高校生とか、聖心女子大の学生とか、ここへ来たときに、あの鉄の床の所に、何かころんと「黄金の林檎」の実が落ちていたような、それを見つけてもらうようなことを想像しています。抽象的で申し訳ないのですが、昔のラスコーの人達は洞窟の向こうに何かを見つけていたのではないのでしょうか。そしてその後の人が絵を描き、さらにその後の人がイメージを重ねていった。「人と自然との交感」。これが僕は、ベンヤミンの言うアウラではないか思います。だからそういう感性とか感情を超えた存在、「何だか分からないもの」。いわゆるライプニッツが言う「何だか分からないもの」をいつも頭に置きながらこのグローバル共生研究所が感性の容器になってもらえればうれしいなという気がします。

永田：ありがとうございます。とかく窮屈な世知辛い世の

中で、どういうふうにも本物の教育というのを創造していくかということ、この絵は示唆していただいているのかなと思いました。

先ほどおっしゃったベンヤミンのアウラは真正性、もしくは存在の重さみたいなものだと思いますが、そういうのが教育の中でどれほどわれわれが受けとめて、学生たちと一緒に試行錯誤をやっているかと…。グランドツアーもそうだと思います。そういう遊び、創造性のある、余白のあると言っているのでしょうか。それがいつの間にか教育から消えつつあるということ、われわれは田窪先生の言葉、そして「黄金の林檎」から教えていただいているのかなと思います。

最後になりますが、先ほど「この林檎は幾つあるのかな」という質問がありましたが、もう1つ、興味をそそられる質問があります。それをもって今日はお開きにしたいと思います。その質問は何かと言うと、「『黄金の林檎』に種はありますか」という質問です。田窪先生、いかがでしょうか。

田窪：花田清輝という美術評論家がアヴァンギャルド芸術論という本を書いておられて、その中に林檎に関する一考察という1章があります。その中で或る画家が岡本太郎に「林檎の中にイデオロギーがはいっているのか？」という話を問い掛けて、岡本太郎は「イデオロギーがあるかないかは知らないが林檎の種が入っていることは間違いないだろう」と答えたと言う話から出発しながら、花田清輝はセザンヌのリングとダリのリングから話を進め、最後はウィリアム・テルの矢を射った瞬間の演劇的效果に収斂しています。ですから僕としては、花田清輝の林檎論というものの中に種が見えないので、そこら辺が喉に引っ掛かっていました。

それで今日の高階先生のお話をいろいろと伺って、僕のものど仏からイデオロギーが落ちる気がしたのですが、やはり私の「黄金の林檎」の中に種はあるかと言ったら、ありません。種をつくっていただけるのは、多分、今日来ていただいている人たちだし、今後、本当にこの作品が何か1つ、感受性を共有している人たちが出てきたときにそこで初めて種ができて、またどこかで実がなっていくのではないかと思います。特に明日の見えない作家なので、今は「黄金の林檎」に種は入っていません（笑）。

永田：ありがとうございます。

田窪：すいません。（拍手）

永田：今の言葉に関連して、もし種というのが生産性の象

徴であるとすれば、「大学というのは、この社会の中の生産関係から孤島のように、小島のように浮かんでいることが大切なのだ」ということをある詩人が言っていたのを思い出しました。まさにそこに大学がそういう存在でいられるか否かがこの作品、そして高階先生及び田窪先生の言葉や水島先生が伝えて下さったメッセージからわれわれが受け取った宿題なのかなと思います。（拍手）

ちょうど時間になりましたので、ここでお開きにしたいと思います。いま一度お二人に、水島先生、田窪先生に拍手をお願い致します。ありがとうございます。

最後に、グローバル共生研究所所長の大橋正明教授から皆さんにご挨拶がございます。大橋先生、よろしく願い致します。

シンポジウムのむすびの言葉

聖心女子大学
グローバル共生研究所所長
大橋正明

今日をご来場いただきましてありがとうございます。今紹介していただきました、このグローバル共生研究所の所長を承りました大橋と申します。普段は、この大学の人間関係学科で国際開発学を教えております。

多くの方がこの場所を覚えていらっしゃるのではないのでしょうか。今から約20年前は青年海外協力隊の隊員たちがその訓練所として、この場所でまさに飛んだり跳ねたりをしていました。その後、JICAの広尾センターになりました。

広尾センターのときには、私はいわゆるNGOの出身の人間なので、この場所を無償で貸していただいて、いろいろなイベントや会議室に使わせていただきました。

ところが昨年1月にこの建物が本学のものになるということになりました。それでこの建物をグローバルプラザという名前にして、3階・4階・5階は国際交流学科と人間関係学科が入るということになりました。ここがちょうど中間の場所で、1階と2階がグローバル共生研究所になっています。

JICAの時代には、入り口を入れて左側には「地球ひろば」という学びの場があり、右側には多国籍のおいしい料理が食べられる場所でした。

「それを上回るものにしろ。」と言われてまして、今回、正面には素晴らしい絵ができたわけでありまして。今回の場所の名前も、既に私どもの副所長の永田が申し上げたのですが、この「黄金の林檎」ができたことで周りのネーミングが決っていきました。「黄金の林檎」の左側「地球ひろば」があった場所に、「BE * hive」という学びの場をつくりました。このBEというのは人間存在であり、hiveというのはハチの巣という意味、つまり育つ場所です。日本で林檎が実るのは、その多くはハチのおかげです。今、人間が受粉するよりも、ハチのほうがよっぽど多く受粉をしています。

さらに入って右側、JICA時代は「フロンティア」と言う名前のカフェがあって、多国籍料理を食べ、世界のお酒も飲んで、小さなパーティーもやれました。今回は、カフェ・ジャスミンという名前にしました。花の名前のジャスミンです。これはペルシャ語で「神様の贈り物」という意味があります。本学の周辺にはいろいろな文化の人たちがいらっしゃいますから、肉を食べない方もいらっしゃれば、ポークだけを食べないという方もいらっしゃいます。そういった多文化の料理を提供できるような場所にしました。またパーティーもしていただけます。無農薬といいますが、大地の会の野菜を使った料理をお出しております。

私どもとしては聖心の学生、あるいは若い人たちが全国からやってきて、ここの「黄金の林檎」を見ながら、BE * hiveで育てていただいて、あるいはエネルギーが必要だと思えばジャスミンでちょっとエネルギーを供給していただいて、花粉のような学問や素養を身に付けて、あちらこちらでまた花を咲かせていってほしいと考えております。つまり1階部分のコンセプトは、自然との共生という形でネーミングさせていただいております。

さて、研究所としては、3つの機能を果たしていくつもりです。1つはそのBE * hiveで良質な問いとか課題に出会って、もっと勉強してみようとか、自分で活動してみようという気持ちになることです。

本当に共生を実現するためには向かいあわなくてはならない様々な問題があります。これについて、研究所の準備に当たった私たちはいろいろな議論をしました。「必ずしも美しい共生じゃなくてもいい。お互い憎しみ合っても、お互いに生きていかななくてはならない」というような共生もある、といった話をしました。そうしたことにしっかり出会って、研究所のもう一つの機能である学びとか研究に移ってほしい。

3つ目は、ここで学生や市民団体や地元の人々がいろいろな活動をするような場所になってほしいと思っています。前のJICAの時代に比べれば面積は限られておりますが、幾つかのスペースは地元の方やNGO・NPOの方、社会を変えていこう、いい方向にしていこうという人たちのために使っていただくようなスペースとしても提供させて頂くことを考えております。ただ、まだ完全ではございません。10月14日の土曜日にオープニングのセレモニーをする頃には、完成しているはずですよ。

ぜひ、そのオープニングのときには皆さんにまた集まっていたいだきたいと思っております。今日はプレ・オープニングですが、本当のオープニングと一緒に皆さんと祝いたいと思っております。そのときは多分、林檎ももっとおいしくなって、みんなにそれを食べて頂きたい、と思っております。

本当に田窪先生、今日はありがとうございました。皆さんにも感謝申し上げます。ありがとうございます。